

や討論のために使う時間」又は「勉強や討論が行われる場所」という意味に変わってきたのである。こういう暇潰しを上流階級だけが楽しめたのは当然であるが、現代の日本と西ドイツの学生は、いかなる大きな特権を持っているのかを自覚しているのであろうか。すなわち、語の本来の意味に立ち返れば、飲み込んだ知識を消化するために必要なのは、「暇」なのである。大学を合理化して在学期間を短縮するよう努力する、政党や文部省において文教政策に従事する者こそが少しギリシャ語を学ぶ時間を都合すべきなのではなかろうか。

(注)

- (1) それは、神聖ローマ帝国の時代に、商人と職人の自治による皇帝の直轄都市が存在したことに由来するものである。
- (2) 前述した指針段階修了後、進路が確定したと言えるのは第8年である。
- (3) これらの州の生徒が特別賢く、かつ教師が平均以上に熱心だという推論は正確でないということはないが、他の解釈も成り立ち得る。つまり、社会民主党はイデオロギー上の理由で統合学校制度を特に促進したとも言われているのである。これらの州でのギムナジウムの生徒の占める割合が、他の州に比し、高いことについては、野党の言によれば、社会民主党がその政権担当の効用を広く一般大衆に誇示するために教育水準を下げた、とされている。すなわち、それ以前にはギムナジウムに進学できなかった層を取り込むために入学者数を増加させて、それを可能にしたと、考えられているのである。
- (4) 西ドイツの男子には18歳から一般兵役義務が存在する。

## 集中授業を担当して

高 木 文 夫

今年度前期にドイツ語教室では授業改革の一つとして、再履修学生用の授業、いわゆるZクラスの一つを夏期休暇中に「集中形式」で行うことにした。それを筆者が担当することになったので、その結果と将来の見込みとを感想をまじえて、ここに記してみたいと思う。

まず、授業のデータを述べよう。「集中授業」に当てた科目は「ドイツ語I2a」である。この科目は二年生以上で、前年以前の同じ「ドイツ語Ia(初級文法前半)」を受講と試験の結果不合格だったものや受講が最後

まで続かないで、脱落した結果単位未習得のものが受ける授業である。対象学部は全学、すなわち教育・法・経済・農の四学部全部の二年生以上が履修にやって来る。今回実際に授業をしたのは夏期休暇もおわりごろの8月29日から9月5日までの一週間余りであるが、この時期の設定に際し、考慮したのは、休みの最初には四国地区のインカレがあることから、まず休みの終わりにした。ついで、夏休み最後の週は専門学部で集中講義や実習があるので、時期を少し早めた。ただし、一般教育では体育実

技のやはり集中授業があるが、それには他の時期にも開講されているものもあるので、考慮しなかった。結果として、体育実技や専門科目の都合で受講できなかった学生もいる——もちろん、この実態は完全に捕捉できないが、個人的に筆者のところへ来た学生の話から、多少のことは推測できる。ただ、さまざまな理由——一般教育主体の下級生とは違って、専門課程に進んだ学生たちの事情は彼らそれぞれに実に多様である——で、「ドイツ語IZa」の集中授業を受講できない学生のためには同じ「ドイツ語IZa」が定時にも開かれているので、ほぼ問題はない。また、この授業の受講申し込み、および手続きはすでに5月初めに締め切ったが、この時点で受講希望者は57名であった。しかし、実際に授業に出て来たのは全員ではなく、39名が授業期間全体を通して出席した。「幽霊学生」がいるのはよくあることだが、その理由としては、定時の授業と掛け持ちして、そちらの方をメインにして、こちらを「保険」にしたり、また「夏休みにはやっぱりいやだ」とか「バイトに忙しくて」など別の理由から、授業には顔を出さなかったものと思われる。ただ、一回出席した学生は、一人の脱落者を除いて、全員ほぼ出席した。

授業は次表のような時間割りで行った。この時間割りはプリントにして、一回目の授業で配付した。

(記号のそれぞれの意味は、)

♡	⇒	通常授業
▽・▼	⇒	試験 である。

日	8/29	30	31	9/1	2	5
曜	月	火	水	木	金	月
I	♡	▽	▽	▼	▽	
II	♡	♡	♡	♡	♡	▼
III		♡	♡	♡	♡	

[ I・II・IIIは校時を表す]

全授業時間数は試験を入れて30時間になるようにしてある。小テスト(▽)は毎日必ず前日に習ったことが身についたかを確認するために行い、9月1日(休)の第一校時にはそれまでの全体について中間試験を行った。小テストおよび中間試験は教科書で学習したことを直接的に問うものだったが、9月5日(月)の最終試験はそれまでに授業で出て来たさまざまなドイツ語の表現を使って、文法的な正確さも追求して、日本語をドイツ語で表現してみるというものにした。このような試験はドイツ語の総合的な学力を調べるのに適していると考えている。学生にはこのような試験を最後にすることは知らせてあるので、少なくとも9月3、4日に準備可能であるはずだった。またこの授業の評価については、これらの試験(小テストを含む)すべてを合算して、さらに宿題の提出状況を加味して行ったが、それは授業中に学生に周知してあった。

時間割りを組む際に最も考慮したのは一日に100分授業を三回(いわゆる三コマ)を割り当てるので、学生にとって過重な負担にならないようにするということである。授業の時間割りは上記のような枠組みであるが、実際には定時の授業では必ず始業と終業の時刻が気になるものだが、受講学生はともかく午後2時40分まではこの授業に出ることを余儀なくされているの

で、校時の切れ目は考える必要はなく、学生の疲労状況を見て、適宜休憩を取ることができた。従って、一日のおよその割り振りを、まず前日の授業で習ったことを確かめる小テスト、最低30分はかかる。そこで一旦軽く休憩し、気分転換をする。成績評価にかかる小テストでひとまず目を覚ましてもらって、次に本格的にその日の授業に取り掛かるというわけである。それを10時少し前から11時半ころまで。冷房がきいた外国語自習室が使用教室なので、LLの機械を使って、ヒアリングや発音練習も間に挟む。コンソール台にいれば、どの学生が練習を一生懸命し、どの学生がさぼっているかは一目でわかり、さらに座るブースが指定されて、氏名がすべて確認されているので、学生のほうは気が抜けない。(ちなみに期間中冷房がきき過ぎた日もあって、うっかり寝ていたら、風邪を引いてしまいそうなこともあった。)文法の練習が終わると後は時間が来るまでビデオにより、ドイツの事情について勉強する。ビデオはNHKで放送した「報道特集」で西ドイツと日本を比較したものをういたが、気分転換になったのか、少し目先が変わったのか、学生には好評だった。機械的にドイツ語を詰め込むよりは、このような言葉の文化的背景について学生に視覚的に見せることで、学生のドイツ語の学習意欲をそそることは色々報告されている。ビデオを見終わると一時間近く昼休みをとって、午後はまた教科書や録音テープを使った学習を時間の終わりまでする。こんな感じの毎日が続いて最終試験の日でようやく学生も教師もこの授業から解放される。

この授業で大変なのは学生も教師も一定期間だけドイツ語の授業に「集中」しなけ

ればならないことだった。しかし、これは逆の言い方もできる。すなわち、この期間は他の雑事を放って、授業のことだけに掛かっていけばいいのであり、それに徹すればこそ、毎日、第四校時をその日の試験の採点(翌日に必ず返した)と翌日の試験問題の作成とその他授業の準備に専心することができた。

この種の授業ではふつう一学期間かけて授業する内容を短期間に済ませることが必須だが、その為には教材の内容が問題となる。定時のドイツ語初級の授業はどのように進められているだろうか。初級文法の場合、ふつう

- 
- ```

graph TD
    A[① 文法事項を説明する] --> B[② 練習問題をやらせる]
    B --> C[③ 正解かどうか確認する]
  
```

という順番で進む。①から③までを一回にやるか、△のところまで切って、二回に分けてやるか、教師により、色々であろう。もし予習を課すのであれば、後者のように二回に分けるほうが効果的と言える。問題は予習にどれくらいの時間がかかるかということである。定時の場合一週間という期間が長すぎることを除けば、予習のための時間はあるだろうし、他の科目の授業とのやりくりをすれば、そのための時間はとれるだろう(もっとも学生はかなりの強制力がないかぎり、ごく一部の例外を除いて自分からはやろうとしない)。単語数が多くて、辞書を引くだけでもかなりの時間がかかるのはこのような「集中授業」には適しない。従って、単語数は限定することがまず肝要

である。そして文法事項の並べ方に飛躍がないこと、語彙の展開に無理がないこと……「集中授業」に適した教材を選ぶには定時以上に気を配らねばならない。そのような条件に適していると判断できた教科書を実際に使ったのだが、授業を終えてみるとこれは「集中授業」だから特に気をつけたが、元々定時の授業にも当てはまることではなかったかと考えるようになった。というのは通常のいわゆる「文法の教科書」には文法事項に合っていないさえすればよしとするような例文が、他の例文との関わりなしに、しかも暗記して役に立つようなことが将来のドイツ語学習にあるかどうか疑わしいものがまみ見られるからである。「文法の授業」と言えども、実際のドイツ語の世界にはありえないような例文を押しつけられては学習者はたまったものではない。単語数が限られていて、しかもそれが文法事項の進展にともない少しずつ形を変えながら登場し、しかも表現に無理がなければ、学習者にとってこんなに楽なことではない。ひとつひとつ確実にステップを踏めば、確実に上の段階に上がれるからである。教材や授業の進め方がこのようなものであれば、「集中形式」でもドイツ語の初級文法の授業が可能である。

授業の最後に学生に感想を記述式で書かせた。学生の感想の中には教師に媚を売るような調子のもも少なくないのが通例だが、それでも傾聴すべき意見の中にはある。学生の感想は概ね「集中授業」に肯定的で、この形式を継続することを希望するものが大半であった。その理由としては、「他の授業と重ならなくて良かった」、「毎日試験があったほうが授業に行く気になってよい」、「短時間で単位が出るのがよい」、「この科

目だけを集中的に勉強するので頭に入りやすい」、「前の授業の内容を忘れることが少ない」、「キャンパスの都合で普通の授業はとりにくい」……などがあった。

従来より外国語の習得は一定期間集中的に行くと効果が上がると言われている。現行のカリキュラムのように、100分授業を週二回で済ませること、しかもその二回もそれぞれ別個に行われていることには批判が強い。しかし、その改善は、特に非常勤講師の都合などから、遅々として進まない。それでも、「集中授業」の経験から初級文法の場合でも、通常の「定時」の授業で現行の枠内でささやかな改善もできるのではと思えることもあった。たとえば、週二回の授業の相互の関連を強めることはもちろん、週一回でもその授業の間隔の間にできるだけ自習——課題を与えてでも——させるような体制を整えること、自習の内容もひたすら悪戦苦闘して予習させるのではなく、次につながる復習などをさせること、小テストの繰り返し、定期試験だけでなく、授業全体で成績の評価をすることなどである。これらはすでに一部のドイツ語教師の間では行われていることなので、いまさら特記することもはばかれるがあえてここに記したい。さらに、このように定時の授業を進めて、内容を豊富にしていくと、「集中形式」でできることとの対比が明らかになり、ドイツ語の初級の場合学生のそれまでの学習量が圧倒的に少ないために、「集中形式」の乱用は危険なものとなるだろう。筆者は今度のケースは現段階ではあくまでも「再履修クラス」に行くものとして考えている。そうでない場合には一層の検討が必要であろう。